石 川 智 子

Strauß und Schleiermacher —— Das Leben Jesu nach 30 Jahren

Tomoko ISHIKAWA

Im Buch *Der Christus des Glaubens und der Jesus der Geschichte* (1865) hat Strauß eine zeitloses Gespräch mit Schleiermacher. Strauß tadelte Schleiermacher deshalb, weil Schleiermacher zwar die Bearbeitung des Leben Jesu auf den Standpunkt der voraussetzungslosen Wissenschaft verheißte, aber er immerhin es nicht zuließ, daß Wissenschaft und Glaube sich widersprechen durfte. Das sah Strauß als das Problem um die Wahrhaftigkeit an, und dachte, daß daraus noch andere Probleme des Schleiermacher kam, wie das über Quellen des Leben Jesu, die Auslegung des Wunder, usw. Strauß trennte danach von Christentum selbst, aber man kann dort sehen, daß Schleiermacher noch eine Frage aufwirft, was man zum das Leben-Jesu-Forschung trieb. Das ihre Gespräch ist von entscheidender Bedeutung für die Leben-Jesu-Forschung bis in die Gegenwart.

はじめに

一八六四年は十九世紀のイエス伝研究における「豊年」⁽¹⁾で、ルナンの『イエス伝』(一八六三年)を皮切りに、いわゆる「リベラルなイエス伝」が数多く出版された。ダーフィット・フリードリヒ・シュトラウスが若き日に出版した『イエス伝』(一八三五・三六年)は当時大きなセンセーションを巻き起こしたが、彼があらためて『ドイツ民族のためのイエス伝』⁽²⁾を出版したのも一八六四年であつた。そしてさらに同じ年、シュライアーマツハーの『イエス伝』が出版されたのは、まさに「運命」⁽³⁾と言えるかもしれない。シュトラウスは新たなイエス伝を執筆するために、シュライアーマツハーによるイエス伝の講義ノートを再読しており、彼がシュライアーマツハーの『イエス伝』を論じるための準備は万端だったのである。

シュライアーマツハーは大学の講義で初めてイエス伝を扱った人物とされている。⁽⁴⁾一方シュトラウスは、二十七歳で出版した『イエス伝』によつて、イエス伝研究の一時代を築くことになる。シュトラウスとシュライアーマツハー——この二人の出会いと対話が、近代イエス伝研究における画期的な出来事であることを疑う余地は無いだろう。もつとも、シュライアーマツハーはシュトラウスの『イエス伝』が出版される前に世を去っており、二人の間には厳密な意味での「対話」は存在していない。しかしシュトラウスにとつては、シュライアーマツハーの講義が『イエス伝』執筆の決定的なきつかけを与えており、そこにはシュライアーマツハーの重要な影響が読み取れる。そしてシュトラウスが最初の『イエス伝』から三十年後、シュライアーマツハーの『イエス伝』の出版を機に書いた『信仰のキリストと歴史のイエス——シュライアーマツハーのイエス伝に対する批判』(一八六五年)において、私

たちはシュトラウスとシュライアーマツハーの、時を隔てた「対話」に立ち会うことができるのである。この著作は全篇がシュライアーマツハーの『イエス伝』に対する余すところない批判であると同時に、当時のイエス伝研究における論点を知るための重要な資料ともなっている。

そこで本稿では、『信仰のキリストと歴史のイエス』を中心に、シュトラウスとシュライアーマツハーの「対話」を追跡していくことにしたい。そしてその過程において、イエス伝研究に対する両者の一致と相違を描き出していくことをさしあたりの課題としたい。なお、シュトラウスとシュライアーマツハーのイエス伝については、シュヴァイツァーの『イエス伝研究史』が最も手近な案内となるだろう。また、両者の『イエス伝』および『信仰のキリストと歴史のイエス』のそれぞれの英訳^⑤に含まれている解説も参考になる。しかし、辞典類の記述を入れても、本稿で扱うテーマに関連する研究は数えるほどしかない^⑥。したがって以下では、両者の対話をできる限り忠実にたどることで問題に取り組んでいくことにしたい。

一 出会い

シュトラウスがシュライアーマツハーの思想をはじめて知ったのは学生時代で、若きシュトラウスは、テュービンゲンに赴任してきた恩師F・C・パウルの講義を通じてシュライアーマツハーに関心をよせるようになった。当時シュトラウスは神秘主義思想に傾倒していたが、シュライアーマツハーを知ったことで新たな扉が開かれたのである。その後、友人たちとのサークルではシュライアーマツハーに次いで、カント、ヘーゲルを研究し、シュトラウスはヘーゲルの思想に熱中していくことになる。

シュトラウスは、大学卒業後も副牧師として勤務するかたわら哲学研究を継続しており、一八三一年にはデューピング大学哲学部に博士論文を提出している。その後、一念発起してシュライアーマツハーとヘーゲルのいるベルリンへ向かうが、不運にも、シュトラウスの到着から十日あまりでヘーゲルがコレラのため死亡してしまう。その死の知らせをシュトラウスにもたらしたのが、初対面のシュライアーマツハーであつた。二人の出会いについて、シュトラウス自身は友人に宛てた手紙で次のように伝えている。

僕は今朝、初めてシュライアーマツハーに会うことができた。彼は言うまでもなく僕にコレラが怖くないかと聞いてきたのだが、僕はそれに対して、そのニュースはもうだいぶ落ち着いてきたし、いまでは実際ほとんど終息に向かっていると答えた。彼は言った、確かにそうだが、奴はなおも偉大な犠牲を要求した——ヘーゲル教授が昨晚コレラで死んだのだ、と。このときの衝撃を考えてくれ！偉大なるシュライアーマツハーも、かの損失と比べれば、この瞬間の僕にとっては重要ではなかつた。⁽⁷⁾

ヘーゲルの死を知ったシュトラウスは、ベルリンを立ち去ることも考えたが、結局思いとどまり、シュライアーマツハーやマールハイネケの講義に参加した。当初、シュトラウスにとってシュライアーマツハーの印象は決して良いものではなく、その講義について、「即興で講義をするから、ノートを取るのが楽ではない」と言つていた。⁽⁸⁾しかし、ヘーゲルの死から約三カ月後に書かれた手紙⁽⁹⁾では、シュライアーマツハーからかなりの収穫を得ていることが読み取れる。シュトラウスはまず、シュライアーマツハーの講義や説教に参加するなかで印象が変わり、講義の仕方についても「何かしら本質的なものを学んだ」⁽¹⁰⁾と語っている。またシュトラウスはその手紙で、次学期にシ

ユライアーマツハーのイエス伝講義が行なわれることに触れて、それがごく稀にしか開講されず、しかもユライアーマツハーによる講義のなかで「最高の講義」であると記している。⁽¹⁾ シュトラウス自身はこの講義に参加できなかったものの、他の学生から二学期分の講義ノート⁽²⁾を手に入れており、講義の内容を知ることでもできたのだろう。興味深いのは、同じ手紙の中でシュトラウス自身がイエス伝に関する自らの講義のプランを明らかにしていることである。このプランを基に後の『イエス伝』が書かれたことを考えると、ユライアーマツハーの講義はシュトラウスにかなりのインパクトを与えたものと思われる。⁽³⁾

もつとも、シュトラウスはユライアーマツハーを手放しで賞賛していたわけではない。ベルリンで出会った友人への書簡で、シュトラウスは次のように述べている。

あのユライアーマツハーに僕はきわめて興奮させられたし、大変感謝している。しかしあの人は僕を満足させなかった。彼は道のりの半分でとどまっていて、最後の言葉を言わないのだ。この言葉を僕が言おう。僕はいまテュービンゲンに戻るところだ。そして、聞いてくれファトケ、僕は僕の考えでイエス伝を書く！⁽⁴⁾

二 シュトラウスの『イエス伝』

シュトラウスの『イエス伝』についてはすでに他のところで論じているので、⁽⁵⁾ここではユライアーマツハーに関わる部分の要点のみをおさえておくことにしたい。

(1) 初版(一八三五—三六年)

シュトラウスの『イエス伝』では、超自然主義的解釈と合理主義的でないし自然主義的解釈との対置、および、その両者を乗り越える神話的解釈が、基本的な議論の枠組みを構成している。主要な論客として、超自然主義者ではオルスハウゼンが、また合理主義の側ではパウルスが挙げられているが、シュライアーマツハーはそのどちらの立場にも位置づけられることなく、「半合理主義的神学者 (halb-rationalistischer Theologe)」などと呼ばれている。⁽¹⁵⁾

キリスト論についてシュライアーマツハーは、信仰者の内的な意識からキリストについての教義を帰納することによって、信仰と学問を調停しようとするが、結局のところ「彼のキリストは史的なキリストではなく観念のキリストである」とシュトラウスは批判する。シュライアーマツハーのキリスト論では、史的イエスが理想的な原型としてのキリストから引き離され、結果として後者のみが理念として称揚されることになる。しかしそのようなキリスト論は、シュトラウスによると、福音書に描かれている神の實在性を空虚な理念と理想で代用させることにほかならない。いかなる存在も対応しないような当為としての理念を想定することは、理念を捨てることと同じである、とシュトラウスは批判する。またシュトラウス自身は、神性と人性の統一という理念において、人性については特定の人間のみに限定されるのではなく、「類 (Gattung)」概念を想定すべきだと主張している。

(2) 第三版(一八三九年)

『イエス伝』の第三版(一八三九年)では、結論部分で重要な変更がなされている。初版の最終節の後半部分が省略されて、その代わり「調停の試み。結び」と題された新たな最終節が書き加えられているのである。⁽¹⁶⁾そこでは、初版の結論の一節、すなわち、イエスという個人において神性と人性が統一されると考えるのは、もっぱら偶然的

で主観的な根拠によるものと論じられている部分が省略されている。⁽¹⁹⁾ それに対して新たに加えられた節で登場するのが、イエスに与えられる「天才 (Genie)」というカテゴリーである。⁽²⁰⁾ そしてこの「天才」概念に、私たちはシュライアーマツハーからの影響を見ることが出来る。

シュトラウスによると、宗教的な天才とは、芸術や学問の領域における天才と同一のカテゴリーに含まれるものであり、人類の精神をより高い段階へと発展させる働きを持っている。したがってイエスもまた、天才というカテゴリーの中で、ホメロスやムハンマド、アレクサンドロスやカエサル、ラファエロやモーツァルトなど、他の天才たちと交際を持つのである。しかし同時にイエスは天才たちの中でも最も高い地位につく。なぜなら、第一に、神的精神が人間の自己意識に直接的に現れるのは、ただ宗教の領域に限られるのであり、第二に、それら宗教の中でもキリスト教が最高位に位置しているからである。ここで、シュトラウスが人間の自己意識における神的精神の直接的な表れを天才の特徴として上げている点に、シュライアーマツハーの「神意識 (Gottesbewußtsein)」と通じる視点が示されている。

なおこれらの変更は、翌年に出版された第四版で、シュトラウス自ら「譲歩」であったと認めて撤回されている。そしてその後、シュトラウスは長く学問から遠ざかることになる。

三 『信仰のキリストと歴史のイエス』

シュライアーマツハーの『イエス伝』は、近代イエス伝研究史の舞台では「脇役」⁽²¹⁾ に追いやられているが、その理由は、たとえばシュヴァイツァーによって端的に示されている。彼によれば、シュライアーマツハーのイエス伝

はシュトラウスの手で「廃線に引きこまれ」、それが「香油を塗られた死体のように出版されたとき、シュトラウスはこの偉大な神学者の死せる書に適切でふさわしい弔辞を述べた⁽²³⁾」のである。そしてここでシュヴァイツァーが「弔辞」と言い表している著作こそ、シュトラウスの『信仰のキリストと歴史のイエス』である。

『信仰のキリストと歴史のイエス』は大きく三部に分かれている。まず始めに、シュライアーマツハーの『イエス伝』について、編集の問題、教義的前提の問題、資料の問題が扱われる。次に『イエス伝』の構成に沿って、その内容が検討される。そして最後に、『イエス伝』に対する批判が簡単にまとめられている。シュトラウスは本書で、シュライアーマツハーの『イエス伝』とその講義ノートをしばしば引用しながら筆を進めていくため、読者はあたかも目の前で二人の議論が展開されているかのような印象を持つに違いない。以下では、その内容をまとめながら、両者による「対話」の論点を取り出していくことにしたい。

(1) 編集、教義的前提および資料の問題

シュライアーマツハーの『イエス伝』を編集したリュートニクは、一八三二年の講義から五人分のノートを集めて、編集作業をおこなったようである。しかし、第一に、シュライアーマツハーの講義が原稿なしになされていること⁽²³⁾、第二に、リュートニクによる編集作業が不十分であることから、シュトラウスはテキストに対して全幅の信頼を置いているわけではない。

さらにシュトラウスは、シュライアーマツハーの前提について検討を加える。シュライアーマツハーは、イエス伝を描く上でキリスト教信仰を前提にすべきでないと主張している。なぜなら、信仰を前提として描かれるイエス伝は、信仰を共にする人々にとってしか意味を持たないからであり、真実を得るためには、「私たちにとはどの

ような観点からも信仰の対象ではないような人々⁽²⁴⁾を扱うのと同じような仕方ではイエスを扱わねばならない。そして探求の結果、信仰が危機にさらされるとしても、信仰は自明のものとして保持されるべきではなく、探求の中でそのつど、非学問的な信仰と非信仰的な学問との間の選択が迫られることになる、シュライアーマツハーは言う。しかし、こうしたシュライアーマツハーの立場を、シュトラウスは「見せかけ (show) ⁽²⁵⁾」に過ぎないと非難する。

シュライアーマツハーは、イエス・キリストにおける神性と人性の統一という命題が、どちらか一方を強調しすぎる危険、すなわち、人性を強調するエビオン派的な見方が、神性を強調するドケイイズムの見方のいずれかに陥る危険にさらされているとする。エビオン派的な観点はイエス伝を書くのを容易にするが、イエスを信仰の根拠とすることを難しくするのに対して、仮理論的な観点は逆にイエスを人間として描くことを難しくする。そこでシュライアーマツハーは、「神意識」を持ち出すことによって、この問題を解決しようとするのである。すなわち、キリストは真正正銘の人間であつたが、人並み外れて神と自分の関係を意識する神意識を持っており、それがキリストの運命を決定づける宗教的・道徳的な原動力になったとシュライアーマツハーは考える。さらに、シュライアーマツハーのキリストは、生涯のあらゆる時期において単に罪から解放されていただけではなく、争いと弱さからも解放されていたと想定されており、そのような無罪性と完全性を保ちつつ、すべての人間と同じように発展したと見なされる。

このようなシュライアーマツハーの前提は、最初に目指されていた教義的前提からの解放とは矛盾するものであり、「約束が守られていない」⁽²⁶⁾とシュトラウスが批判するところとなる。なおシュトラウスは、シュライアーマツハーがイエス伝を扱う際に一貫して「キリスト」という呼称を用いることについても、それが教義的な立場を露呈していると指摘する⁽²⁷⁾。

また、イエス伝の資料の問題に関して、シュライアーマツハーはまず共観福音書とヨハネ福音書を対置する⁽²⁸⁾。そして前者がばらばらの物語の寄せ集めであるのに対して、後者は一貫して一人の作者によって物語られていると言⁽²⁹⁾い、しかも、前者は後者よりも後の世代に書かれたもので、後者つまりヨハネ福音書こそ使徒や使徒の弟子による著作である⁽³⁰⁾と見なしている。この点、すなわちシュライアーマツハーのヨハネ福音書びいきも、シュトラウスが本書で一貫して批判するところである。

(2) 十二歳のイエス

シュライアーマツハーの講義では、イエスの生涯について、公に登場する以前、イエスが捕らえられるまでの公生涯、そして逮捕から昇天までの三つの時期に分けて扱われており、シュトラウスもその区分に沿って議論を進めていく。

イエスの誕生と幼年時代の物語について、シュトラウスとシュライアーマツハーの違いを特徴的に示すのは、エルサレムの神殿を訪れた十二歳のイエスを描くルカ福音書の物語についての解釈である。シュトラウスはこの物語において、英雄物語などに典型的な特徴をみる。そのような物語では、対象となる人物の顕著な性質をできるだけ早い時期に認めようとする⁽³¹⁾ことがよくあり、こうした「伝説形成 (Sagenbildung)」は同世代においてもありうることである。ところがシュライアーマツハーは、この物語を歴史的な事実に基づいていると解釈し、次のように述べる。「ルカの物語は、私にとつては真正さという特徴を極めて高いレベルで備えている。ある傾向性のために物語られたという疑いに属するものは何もない。その状況下できわめてありそうな場面についての素朴な表現である⁽³²⁾」。さらにシュライアーマツハーは、この物語にイエスの神意識の萌芽を見ている。彼によると、神意識が始めから

イエスに備わっていたと考えるならばドケイズムに陥ってしまうが、神意識(32)それ自体は人間の本質として共通しており、その発展の程度が人によって異なっているにすぎない。すなわち、ある人の意識を構成するすべての要素が神との関わりについての意識と結びつき、しかもその結びつきが明確で完全である場合は、その神意識を最大のものとなすことができるし、また逆に、神意識が常に外的な刺激によってしか得られなかったり、神意識の発展に抵抗していたりするような人の場合には、その神意識を最小のものとなすことができる。そしてイエスについては、最大の神意識を想定すべきであつて、その限りでは、十二歳のイエスが神殿で神との関係について語ることも当然だとされるのである。(33)

(3) 奇跡の問題

シュライアーマツハーは、イエスの公生涯を外面的側面と内的側面に分けており、前者には地域性および対外的な関係や生活の仕方を、後者にはイエスの教えと共同体設立のための活動を含めている。外的な側面に関する議論のなかで、シュトラウスが特に中心的に論じているのが、奇跡の問題である。シュトラウスはシュライアーマツハーによる奇跡の議論に関して、まず、シュライアーマツハーの「信仰論」を参照しながら、次のようにコメントしている。

シュライアーマツハーの一般的な宗教的信仰も、特殊なキリスト教信仰も、直接には奇跡を必要としない。しかし、彼の書物への信仰 (Schriftglaube) が、そしてここではそれは彼のヨハネ福音書信仰のみを意味するのだが、その書物への信仰が奇跡を求めるのであり、その限りで間接的にはあるが、彼のキリスト信仰が奇跡を

求めるのである。⁽³⁴⁾

シュライアーマッハーは奇跡物語を扱う際に、まず「奇跡 (Wunder)」概念自体を検討していく。彼によると、新約聖書の時代と現代とは、「奇跡」の意味する内容が異なっている。すなわち、自然についてより広く体系的な知識を持った私たちには、「自然」と「奇跡」、「自然」と「超自然」の対照は重大な意味を持つが、キリストの時代においては、それは「普通」のものと「普通ではない」・「並外れた」ものとの対照以上の意味は持たなかった、と⁽³⁵⁾言う。しかも、現代の私たちも超自然的なものをはっきり規定できるわけではないことを考えるならば、私たちの状況はキリストの行為を直接目撃した人びとのそれとかなり似通っている。こうして、シュライアーマッハーは奇跡概念を拡張し、奇跡物語を説明するための「きっかけ (Anknüpfungspunkt)」⁽³⁶⁾を見出すのである。

さらに、彼は奇跡物語について、その行為が道徳的で、他の人間の行為と類似関係にあるほど史実として理解できるし、その逆であるほど史実的ではなくなるという基準を立てる。⁽³⁷⁾そしてこの基準から、癒しの奇跡がもつとも説明可能なものとされる。彼はイエスによる癒しを、純粹に精神的な作用であるところのイエスの意志が、身体的な状態に作用したものと考え、そこに、自然科学の領域で観察されうるがまだ説明されていない自然法則との共通性を見るのである。また、福音書に描かれた死者の復活に関して、彼はヤイロの娘は仮死状態であると結論し、ナインの若者についてもヤイロの娘の場合と共通点を見ている。またラザロの復活については、キリストの行為ではなく、キリストを通じて起こった奇跡であり、イエス自身によって引き起こされた出来事ではなく、イエスの祈りによって引き起こされた神の作用と解釈された。

以上のような奇跡の説明に関してシュトラウスは、シュライアーマッハーが神話的解釈に接近しつつ、それを何

と、かして回避しようとしていたと批判する。シユトラウスは自分の講義ノートから、シユライアーマツハーの次のような言葉を引用している。

福音書は……キリストに関する私たちの唯一の歴史的な源泉であり、そこでは多かれ少なかれ奇跡が強調されて物語られているので、奇跡についての私たちの判断は、それを通じて福音書の信頼性が傷つけられないようなものでなくてはならない。というのも、さもないければキリストの人格 (Person Christi) への私たちの信仰が墮落し、彼は私たちにとって神話的存在になつてしまふ！⁽³⁸⁾

(4) 十字架と復活

十字架についてシユライアーマツハーが問うのは、イエスの死が現実であつたか否かという問題であるが、彼はそのどちらかに決定することは「まったくどうでもいい」ことであり、さらにそれを「確かめるための手段は全然無い」と言う。⁽³⁹⁾ しかしシユトラウスによれば、シユライアーマツハーはイエスの復活後の状態をまったく自然的な、すなわち他の人間と同様の状態として解釈することに尽力しており、そこから考えるとシユライアーマツハーは、復活も自然的に解釈し、イエスが実際に死んだとは考えていなかったはずである。シユライアーマツハーは、イエスが他の者には死んだように見えたのであり、「私たちはこれ以上この事実に立ち入るべきではない」と結論するが、シユトラウスはこの言葉を次のように言いかえる。「ここではこれ以上考えるべきではない、なぜなら、さもないければ信仰は容易にそこなわれるのだから」。⁽⁴⁰⁾

復活後のイエスの状態に関して、シユライアーマツハーは次のように論じる。まず、福音書から復活後のイエス

について二つの対立する暗示が読み取られる。すなわち、一方では、イエスがまったく以前のように生を回復しているという暗示があり、もう一方では、イエスは実在せず、超自然的な存在と見なされているという暗示がある。シュライアーマツハーは、後者の暗示はもっぱら弟子たちの側から示されるもので、イエス自身は一貫して復活後の生を人間的なものとして示そうとしていると考え、復活後のイエスを超自然的な存在として描く物語も、自然的な、歴史的にもありうることと見なそうとする⁽⁴⁾。

復活に対するシュライアーマツハーの姿勢は、奇跡物語に対するそれに通じている。キリストに対する正しい信仰は復活を考慮しなくても成立するが、聖書には復活が物語られており、それゆえに復活を受け容れるのだ、と彼は述べる。シュトラウスによれば、ここでシュライアーマツハーが念頭においている論敵は、弟子たちが復活について自己欺瞞的に語っていると想定する人々である。シュライアーマツハーは、イエスの復活が自己欺瞞だとすると、福音書のすべての物語が欺瞞となってしまうと危惧する⁽⁵⁾。しかしシュトラウスは、その論理が誤りであって、むしろ物語のどこで歴史的に不可能なことが語られているか、その原則を見出すこと、そして確実に真実ではないと推定されるものについてはそのように分類し、真実でありうることにについても、もしかしたら真実ではないかも知れないという不確実性を残しておくべきだとする。彼は福音書で奇跡として描かれる報告にはメシア表象が関わっており、メシア概念のもつとも強力な否定に対する反撃が、奇跡のクライマックス、つまり復活であると考ええる。そしてシュトラウスは、エピソード的な説明とドケイジズム的な説明の両極を避けようとする努力もむなしく、シュライアーマツハーはドケイジズムに陥ったと断言するのである⁽⁶⁾。

おわりに

『信仰のキリストと歴史のイエス』においてシュトラウスは、シュライアーマッハーの『イエス伝』を論じつくしたことになるが、その評価は若き日に友人へ宛てた手紙の言葉に凝縮されており、それは結果的に最後まで変わらなかったと言つてもいいだろう。その手紙でシュトラウスは、道のりの半分で留まるシュライアーマッハーに満足できないと確かに訴えていた。しかしここで、その訴えの前に置かれた言葉を思い起こしておきたい。シュトラウスは、シュライアーマッハーから刺激を受け「感謝している」と書き添えることを忘れてはいないのである。シュトラウスの文章はアイロニカルでレトリックに満ちており、批判のために費やされる言葉は増幅されて読者の耳に響く。そのため、シュライアーマッハーに対する評価も必要以上に否定的な色彩が目につくのだが、一歩引いてみるならば、それは同じくらい強い肯定に縁どられてもいる。シュライアーマッハーに対して心から感嘆し、賞賛する部分があるからこそ、そこに見出される致命的と思えるような欠点について、強い失望を込めて批判せずにはいられない。シュトラウスのシュライアーマッハーに対する態度には、こうした両義性が常につきまとつてゐる。

シュライアーマッハーの『イエス伝』に対する批判の最後に、シュトラウスは自らの議論をまとめる数節を書き添えている。そこで最後に、その部分を検討しながら、シュトラウスとシュライアーマッハーの対話を振り返つていくことにしたい。

シュライアーマッハーはキリスト論においては超自然主義者で、批判と釈義においては合理主義者だと言える。

……超自然的なキリストを歴史的な個人として失ってしまったために、福音書を歴史的な資料として放棄してはならないのである。⁽⁴⁵⁾

シュトラウスによると、シュライアーマツハーのキリストとは、この世を罪なきままで逍遙し、常に神と一体となった魂を持つような純粹な心象 (Bild) である。シュライアーマツハーは、この心象が史的イエス以外からは決して得られないと考えている。それに対してシュトラウスは、シュライアーマツハーのキリストが新約聖書から直接得られるわけではなく、かなりの部分が現代に由来していると考える。シュトラウス自身は、罪なき人間、神と一なる魂を備えた人間の心象が人間性の理想であるという点では、シュライアーマツハーに同意しつつも、その起源を（歴史上の一個人ではなく）人間の本質、倫理的・宗教的な資質にあると見ている。そして、個別のかつ歴史的に存在したキリストに「情熱 (Leidenschaft)」を抱くのは、「その他の点では一貫して現代的な精神を持つシュライアーマツハーにおけるアナクロニズム」である、とシュトラウスは批判するのである。⁽⁴⁶⁾

シュライアーマツハーは、自らのキリストをあくまでも福音書の中に見出そうとするからこそ、ヨハネ福音書を選ぶ。しかしシュトラウスはその姿勢を批判して、共観福音書とヨハネ福音書においては、「内容と立場からして、両者を分けることができないくらい多くのものが共通している」と言う。⁽⁴⁷⁾ ここで指摘されている福音書の共通性、すなわち、福音書を福音書たらしめている特徴が、シュトラウスが言うところの「神話的」表現として捉えられていることは明らかであろう。

シュライアーマツハーの誤った探求から生じる神学的教説は、イエスをなんらかの超自然的な存在とみなすこ

とをやめるか、あるいは福音書を厳密な意味で歴史的な情報と見なすことを断念するかのどちらかである。前者を取れば後者はなくなり、後者を取ればおのずと前者はなくなる。両方の否定から肯定を導き出すのに必要なのは、イエスを人間として、一連の宗教的天才のなかでは高い、私が知る限りでは最も高い人格として、しかしそれでも他の人と同じような人間として見るということであり、福音書を、この人格の核のまわりにつなげられた神話と理解するべきだということである。⁽⁴⁸⁾

シュトラウスによれば、キリスト教世界にとって重要なのは、伝統的な信仰および福音書との「折り合いをつける (auseinandersetzen)」ことだが、シュライアーマツハーの「イエス伝」は逆に、それらに「同意させようとする (einsetzen)」試みである。福音書記者たちがイエスについて語り、信仰の基礎を築いた時代の視点と私たちの時代の視点とはおよそ異なっており、福音書の物語はもはや文字通りの真実とは受け取られない。この事実を認めることは「誠実さの義務 (Pflicht der Wahrheit)」である。福音書の世界観と私たちの世界観という「もはや一緒にはできない二つのものを無理やり調停する試み」は、シュトラウスにとって、「より深い憤りを引き起こす」もの、聖書を歪曲し、信仰を偽装するものにほかならない。⁽⁴⁹⁾

こうした「憤り」の深さを原動力にシュトラウスが語る結びの言葉は、しかしながら、どこか吹っ切れた、明るさすらも感じられる響きを含んでいる。

教義における理想的なキリストが一方にあり、歴史的なナザレのイエスがもう一方にあって、それらは再び一緒になることはない。互いに独立して、一方は根本的に容赦なく検証され、もう一方はより深くより完全に認

識されて、人間の生にとって一層実りあるものとなる。来るべき時代の神学の課題はそこにある……。(50)

このシュトラウスの言葉は、七年後に書かれた遺著『古い信仰と新しい信仰』(51)へとつながる道を示していると言えよう。すなわち、もはや「歴史的なナザレのイエス」については語られず、「一層実りある」「理想的なキリスト」のみが問題となる場所、もはやキリスト教とは言えないような、別の新たな「宗教」が立ち現れる場所へと通じる道である。

しかし、ここに至ってどこからか、シュライアーマツハーの言葉が聞こえてはこないだろうか。シュライアーマツハーは声をあげる、「否、私たちに救い主の存在が与えられているという、この生の充溢と喜びがなければ、私は生きていたくない!」(52)——この言葉には、シュトラウスが使った意味ではないとしても、ある種の「誠実さ」が確かにあると言えるのではないだろうか。そしてシュライアーマツハーは、福音書の時代と現代との歴然たる差異を認めつつも、シュトラウスの批判に應えて逆に問い返しているのではないだろうか。その現代にあつて、それでもなおイエス伝を描くようにいざなうものは、いったい何なのか、と。

本稿では、シュトラウスとシュライアーマツハーの対話をもつばらシュトラウスの側から描いてきた。しかしながら、両者の議論から浮かび上がる論点をより正確に把握するためには、当然シュライアーマツハーの議論をそれ自体で検討することが必要であり、本稿はその意味で課題の半分しか達成していないことになる。また、現代のイエス伝研究から両者の議論を照らし出す作業も不可欠であろうが、この点についてもほとんど触れることができなかった。これらの不足については、今後のさらなる課題として取り組んでいくことにしたい。

参考文献

- Strauß, LJ (1835/36) David Friedrich Strauß, *Das Leben Jesu, kritisch bearbeitet*, Tübingen: C.F.Osiander, 1835-36. (基督教書局版『イエスの生涯』全三巻、教文館、一九九六年)
- Strauß, LJ (1839) Strauß, *ibid.*, 3.Aufl., 1839.
- CGJG Strauß, *Der Christus des Glaubens und der Jesus der Geschichte: Eine Kritik des Schleiermacher'schen Lebens Jesu*, 1865, hrsg.von Hans-Jürgen Geischer, Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn, 1971. (Leander E. Keck (ed.), *The Christ of Faith and the Jesus of History: A Critique of Schleiermacher's Life of Jesus*, Philadelphia: Fortress Press, 1977.)
- Schleiermacher, LJ Friedrich Schleiermacher, *Das Leben Jesu*, 2 Bde., hrsg.von K. A. Rüttenik, Berlin: Georg Reimer, 1864. (Jack C. Verheyden (ed.)/ S. Maclean Gilmour (trans.), *The Life of Jesus*, Mifflintown: Sigler Press, 1997.)

註

- (一) Jack C. Verheyden (ed.), Friedrich Schleiermacher, *The Life of Jesus*, S. Maclean Gilmour (trans.), Mifflintown: Sigler Press, 1997, p.xv. 題名による訳題より。本書は一八六四年の『イエス伝』の翻訳で、L・E・ケックによるイエス伝研究シリーズ (Lives of Jesus Series) のなかの一冊として一九七五年に出版された版の再版である。
- (二) Strauß, *Das Leben Jesu für das deutsche Volk bearbeitet*, Leipzig: F.A.Brockhaus, 1864.
- (三) Dietz Lange, *Historischer Jesus oder mythischer Christus: Untersuchungen zu dem Gegensatz zwischen Friedrich Schleiermacher und David Friedrich Strauß*, Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn, 1975. S.83.
- (四) Albert Schweitzer, *Geschichte der Leben-Jesu-Forschung*, 9. Aufl., Nachdr. d. 7. Aufl. Tübingen: J.C.B.Mohr (UTB), 1984, S.100. 『イエス伝研究史 (上)』濱藤彰、森田雄三郎共訳、白水社、一九六〇年 (一九六三年、第四版)、一三八—一三九頁。

- (5) シュライアーマッハーの『イエス伝』の英訳は註(1)を参照のこと。シュトラウスの『イエス伝』の英訳はいくつか種類があるが、ここでは以下の版を挙げよう。Peter C. Hodgson (ed.), *The Life of Jesus Critically Examined*, London: SCM Press, 1973 (編者による序論 "Strauss's Theological Development from 1825 to 1840" を参照) 他、『信仰のキリストと歴史のイエス』の英訳として Leander E. Keck (ed.), *The Christ of Faith and the Jesus of History: A Critique of Schleiermacher's Life of Jesus*, Philadelphia: Fortress Press, 1977.
- (6) その中心をいとも包括的な研究は Dietz Lange, *Historischer Jesus oder mythischer Christus: Untersuchungen zu dem Gegensatz zwischen Friedrich Schleiermacher und David Friedrich Strauß*, Gütersloh: Gütersloher Verlaghaus Gerd Mohn, 1975. であるが、議論が広範囲にわたるため、本稿では限られた部分しか参照できなかった。
- (7) Jörg F. Sandberger, *David Friedrich Strauß als theologischer Hegelianer: Mit unveröffentlichten Briefen*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1972, S.189.
- (8) *ibid.*, S.190.
- (9) *ibid.*, S.192-199.
- (10) *ibid.*, S.193.
- (11) シュライアーマッハーが最初にイエス伝講義をおこなったのは、一八一九年から一八二〇年の冬学期であった。その後、さらに四回の講義がおこなわれた(一八一九—二〇年、一八二二年、一八二三年、一八二九—三〇年、一八三二年。cf. Schleiermacher, LJ (英訳), p.viii-ix)。ただしシュトラウスが言及しているのは一八三二年の講義である。
- (12) Friedrich Schleiermacher, *Theologische Enzyklopädie (1831/32), Nachschrift D. F. Strauß*, hrsg. von Walter Sachs, Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1987, S.XXXI. シュトラウスが入手したのは、一八二三年および一八二九—三〇年の分。
- (13) ただし、この手紙はシュトラウスがヘーゲルの宗教哲学講義の抜粋ノートを書き上げた翌日の日付になっている。

と見逃せなく。cf. *ibid.*, S.XXI.

(14) *ibid.*, S.XXXVI.

(15) 拙論「D・F・シュトラウスの「神話」理解」(『基督教学』第三五号、北海道基督教学会、二〇〇〇年、一一一九頁)および「D・F・シュトラウスのキリスト論」(『哲学』第三八号、北海道大学哲学会、二〇〇二年、九五—一二頁)。

(16) Strauß, LJ(1835/36), 2.Bd., S.138. 岩波訳、Ⅱ一二九頁。

(17) *ibid.*, S.687. 岩波訳、Ⅱ六〇一頁。

(18) Strauß, LJ(1839), 2.Bd., S.770-779.

(19) Strauß, LJ(1835/36), 2.Bd., S. 735-736. 岩波訳、Ⅱ六一四頁。

(20) cf. Sandberger, *op.cit.*, S.112-140.

(21) Kurt Nowak, *Schleiermacher: Leben, Werk und Wirkung*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht (UTB2215), 2002 (2. Aufl.), S.237.

(22) Schweizer, *op.cit.*, S.100 遠藤・森田訳、一三九頁。

(23) シュトラウスはシュライアーマッハーの講義を著作に編集することについて、「動き回っているダンサーを写真に撮るようなもの」(CGIG (英訳), p.13) だとコメントしている。シュトラウスは、シュライアーマッハーの原稿を用いない講義スタイルを印象深いものとして思い返すと同時に、講義よりもむしろ教会の説教壇でのシュライアーマッハーを賞賛している。

(24) Schleiermacher, LJ, S.20; p.21.

(25) CGIG, S.16.

(26) *ibid.*, S.26.

- (27) *ibid.*, S.26. なお、シュライアーマッハーの講義は当初「キリスト伝 (Das Leben Christi)」と言われていた。cf. Nowak, S.244.
- (28) 「四つの正典福音書に関して、厳密に言えば、私たちはそもそも二つの異なる資料しか持っていない。ヨハネ福音書が一つであり、他の三つのものがまとめてもう一つのものである」(Schleiermacher, LJ, S.38, p.37.)。
- (29) たとえば以下の箇所を参照。 *ibid.*, S.181-182; p.171.
- (30) CGJG, S.37. ここでシュトラウスは自分自身の例を挙げている。二十七歳で書いた『イエス伝』によって「無神論者」と非難されたシュトラウスに、その後、十七歳の頃すでに神の名のもとの誓いを拒絶したという噂がたてられたという。シュトラウスは「十七歳の頃、私にはそもそも宗教的な疑いはまったく生じておらず、さらに長い間、私は正統的な信仰を持つキリスト教徒だった」と述べている。
- (31) Schleiermacher, LJ, S.80-81; p.76.
- (32) *ibid.*, S.83; p.79.
- (33) *ibid.*, S.99f.; p.93f.
- (34) CGJG, S.52.
- (35) Schleiermacher, LJ, S.206; p.194.
- (36) CGJG, S.53.
- (37) Schleiermacher, LJ, S.219; p.205.
- (38) CGJG, S.60.
- (39) Schleiermacher, LJ, S.443; p.415.
- (40) CGJG, S.77.
- (41) エマオで現れたイエスに弟子たちが気付かなかったのは、弟子たちが処刑されたイエスの復活をまったく予想して

いなかったからである (Schliermacher, LJ, S.474; p.445.)⁷ など。

- (42) 「もし、キリストが十字架の死の後も弟子たちと一緒にいたことに關する、これら全ての物語が欺瞞であるなら、キリストについての全ての物語は欺瞞である。これらの物語は實際に眞実と見なされたこととして置かれている。全体の事柄を放棄するか、あるいはこれをも受け入れるかどちらかで、ほかの全ては矛盾しているのである」 (*ibid.*, S.471; p.442).⁸

(43) CGJG, S.93.

(44) 本稿の第一章末尾に挙げた手紙。

(45) CGJG, S.100.

(46) *ibid.*, S.104–105.

(47) *ibid.*, S.100.

(48) *ibid.*, S.100–101.

(49) *ibid.*, S.101.

(50) CGJG, S.106.

(51) Strauß, *Die alte und der neue Glaube*, Leipzig, 1872.

(52) CGJG, S.104. シュライアーマッハーの説教からの引用。